OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	志向的類型論としての現象学
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 99-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66621
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

志向的類型論としての現象学

紀平知樹

現象学は何であるかという問いはこれまでたびたび提出されてきた問いである。そしてその問いに対する答えもそのつど提出されている。しかしそれらはいまだ十分であるとはいえないように思われる。フッサールの現象学に関してのみいうなら、この問いはフィンクがあげたフッサール現象学の操作概念を解明することによってはじめて十分に答えることができるようになるだろう。アルフレッド・シュッツはフィンクがあげた操作概念に、更に類型という概念を付け加えている。本稿の目的は、この類型とは何か、そしてそれはフッサール現象学の中でどのような役割を果たしているのかということを明らかにすることにある。

1　相関関係の分析

「人はやっと脱却した誤謬に対しては最も厳格である」というゲーテの言葉を掲げてフッサールは『論理学研究』の第一巻を、すなわち現象学を開始する。そこでは彼が脱却した「誤謬」、つまり心理学主義に対する非常に厳しい論駁がおこなわれているわけである。[1] ここではまず、なぜフッサールは心理学主義を批判しなければならなかったのかということを明らかにしておきたい。

フッサールが『論理学研究』を執筆していた当時の哲学における支配的な勢力は心理学主義である。フッサールはそれに対して反旗を翻したわけであるが、そうしたのはフッサールだけではない。フレーゲはフッサールよりも先に心理学主義を批判している。従って心理学主義を批判することがそのまま直接フッサール独自の思想であるということではない。むしろフッサールの主眼は心理学主義を批判することにあるのではないというほうが妥当かもしれない。『論理学研究』において、あるいは彼の思索の全体を導いている「事象的動機」(LU I, S. VII) は

心理学主義に対する批判なのではなく—それが一つの重要な契機をなしていることは間違いないが—、むしろ「認識作用の主観性と認識内容の客観性との相互関係」(ebd.)である。これはフッサールの最後の著作となった『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』において『論理学研究』執筆当時のことを振り返り述べているところからも明かである。

この経験対象と与えられ方との普遍的な相関のアプリオリを最初に思いついたとき(それはわたしの『論理学研究』を推敲している間の、ほぼ1898年頃のことであるが)、それは深くわたしの心を動かしたので、それ以来わたしの全生涯の労作は、この相関のアプリオリを体系的に完成するという課題によって支配されてきた。(VI, S. 169)

フッサールにとって何よりも重要なのは、相関関係という問題系であるということは明かであろう。主観的なものだけが、あるいは客観的なものだけが存在するということになるとこの相関関係は成立しないのである。従ってフッサールは、『論理学研究』の第一巻において心理学主義を批判することによって、客観的なもの、あるいは理念的なものの領域を確保したのであり、それが心理学主義を批判する理由である。このようなフッサールの意図は『論理学研究』の構成からもみてとることができる。『論理学研究』の第一巻と第二巻の「溝」に関してはこれまでもたびたび指摘されてきた。フッサールの現象学にいち早く賛同を表明したミュンヘン学派においては、第一巻に関しては高く評価したが、しかし第二巻はその心理学的な色彩のために失望の色を禁じ得なかったという。しかしこの構成に関しても相関関係の分析という観点からは容易に理解できることであって、第一巻において心理学主義を批判し、論理学の客観性、理念性を確保したうえで、第二巻では、その「現象学的起源」(LU I, S. 244)[2]の分析がおこなわれているのである。このような構成は、後年の『形式論理学と超越論的論理学』(以下『論理学』と略記)においても顕著にあらわれている。その書では、第一部でまず伝統的な論理学の検討が行われ、第二部において超越論的論理学が論じられることになる。

『論理学』の予備的考察においてフッサールはロゴスという語の解明をおこなっている。このロゴスという語の意味のうちにこそフッサールが相関関係を確信する理由を見て取ることができる。相関関係とは、主観と客観との間の対応関係を意味しているが、この二つのものの間に関係が成立するということは、この二つのものを繋ぐ何かが存在しなければならないのである。この二つのものを繋ぐもの、あるいはこの二つの項を貫く統一原理こそがロゴスなのである。このことを確認するために、まず『論理学』におけるフッサールのロゴスという語の解明を

見ておかなければならない。

ロゴスという語、それはそもそも論理学という名前が由来するところのものなのであるが、そのロゴスは非常にたくさんの意味を持っているということをフッサールはまず指摘する。[3] そしてフッサールはロゴスという語の意味を二つのグループに分けている。それによればまず第一にロゴスとは、ある時は語を、そして語り（Rede）そのものを意味し、また語りが語っていることについて、そしてまた語りのうちに存立している事態を意味する。そしてまた産出された命題思想や表現によって思念されたものなどを意味し、さらにはそのようなものを産み出す精神的な作用そのものをも意味するという。そして第二のグループに関して。フッサールは、ロゴスという語の意味において学問的な関心が働いている場合には理性規範という理念が登場し、ロゴスという語は含蓄ある意味を受け取ることになるという。すなわちロゴスとは、能力としての理性そのもの、理性的な思惟、そして洞察的な真理に向けられた思惟をも意味するという。従ってロゴスという語の意味には、一方で客観的に形成された意味形成体があり、また他方で、そのようなものを産み出す主観的な作用も含まれることになる。

さて、論理学は「論理的なもの（ロゴス的なもの）一般についての学問」（XVII, S. 31）である。そうすると論理学そのものもロゴスの二面性を持っていなければならないはずである。すなわち論理学は一方で理性の能作を問題にし、また他方でその能作によって産み出された成果を問題としなければならないであろう。この成果ということで論理学の主題となるのは、判断や認識形成体の様々な形式であって、これは明らかに客観的な方向に向いた主題系である。これと対立する方向の主題系は主観的な主題系である。そこにおいて分析の眼差しは「理論的な理性がその能作を完成させる深く隠された主観的な形式」（XVII, S. 38）へと向かっていくのである。「深く隠されている」とは次のようなことである。例えばわたしが何らかの判断をおこなっている場合、その判断をおこなっている作用にとっての主題は、作用そのものではなく、いままさに判断されている事態が主題なのである。従って、作用は「主題をなすが、まさにそのために、そして本質的に作用そのものは主題的ではない」（ebd.）のである。これが隠されているということの意味であるが、しかしまさにその隠された作用、すなわち志向性のうちに「客観的な形成体はその起源をもつ」（ebd.）のである。この隠されたものを明るみにだすのが反省である。つまり反省によって作用が主題にされるのである。論理学といえば、客観的な方向の主題のみが研究されてきたのであるが、フッサールは主観的な方向にも目を向けることの必要性を説いている。このような見解はすでに『論理学研究』においても、またさらに『算術の哲学』においても示されている。『算術の哲学』においては

「単にあの算術的な関心ではなく、むしろとりわけこの論理学的な、そして心理学的な関心を充たすことをわたしは以下の諸分析の課題として示す」(XII, S.13) と述べている。また『論理学研究』の第一巻においては数学者と哲学者の役割分担として述べられていた。すなわち数学者は単なる技術者であり、理論を構築する建築家であって、理論の本質を洞察する必要はないのである。[4] それに対して哲学者は「認識批判的反省」(EU, S. 254) を行うべきであって、「理論の本質は何か、理論一般を可能にするものは何か、などを問う」(ebd.) ことがその仕事なのである。

フッサールが論理学ということで主題として論じるのは、アリストテレス以来の命題論理学、その中でも最も根本的な形式であると見なされるS ist pという判断である。従ってフレーゲ以降の新しい論理学はフッサールの分析からは排除されている。

形式論理学の核心は命題論理学、つまり判断とその「形式」に関する理論なのだ。それも起源のぎりぎりまで遡ってそういえるばかりでなく、形式的な普遍学たる形式数学をうちに含むような、じゅうぶん完成された形式論理学についても同じことがいえる。〔中略〕判断論は歴史的根拠からしても、事柄に関わる根拠からしても、形式論理学の全問題領域の中で中心的な位置を占める。(EU, S.13)

従ってフッサールの分析の焦点は、S ist pという判断の現象学的起源の解明に向けられることになる。すなわち、意識のうちで、いかにしてこのS ist pという判断が構成されてくるのかということを解明することが課題となるのである。

2 記述的本質論としての現象学

このようにして現象学が主題とするものの方向は明らかになったと思われるが、さらにここで『イデーンI』のフッサールの記述を追うことによって現象学の性格をさらに明らかにしてみたいと思う。そこでフッサールは精密自然科学との対比で現象学の扱う主題がどのようなものか、そして現象学はなにかということを明らかにしている。

直截にいってしまえば現象学は記述的本質論であるということがいえる。そうするといったい何を記述するのか、また本質とはなにかということが問題となるであろう。もちろん現象学が焦点をあてる方向は、論理的形成体ではなく、それを産み出す作用、すなわち意識である。従ってよく知られているように現象学は超越論的に純化された意識の記述をおこなうということになる。しかし現象学はまた本質論でもあるがゆえに、単な

る意識の記述ではなく、意識の本質を記述することが課題となる。

意識にとって本質的なものをフッサールはどのように考えていたのかということをここで明らかにする必要がある。フッサールによれば本質には形式的本質と質料的本質の二種類がある。これら二種類の本質のどちらを扱うかによって、本質学も形式的本質学と質料的本質学（領域的形相学・領域的存在論）の二種類に分かれることになる。形式的本質とは、「空虚な形式という仕方においてあらゆる可能的本質に適合するもの」(III, S.21) である。さてこの空虚な形式は、「すべての普遍性に法則を指定する」(III, S.22) のであり、従って質料的本質もその形式の指定を受けなければならないのである。そうすると質料的本質学は、形式的本質学に、その形式の指定を受けなければならないということになり、またそこから質料的本質学は、形式的本質学に従属するということになるのである。この形式的本質学の理想をフッサールは数学の多様体論に見ている。フッサールによれば現象学は形式的な学科に属するのではないという。すなわち現象学は質料的本質を扱う学問である。このことをさらに記述的学問と精密な学問の対比によって明らかにしておく。記述的学問が扱うのは「漠然とした形態類型」(III, S.138) であって、それは感性的直観によって把握される。もちろん現象学は本質学であるのでその形態学的類型を本質にまで高めなければならない。そうするとそこにあらわれるのは「類型的本質」あるいは「形態学的本質」(ebd.) であって、それは感性的直観ではなく本質直観によって把握されるのである。フッサールは類型的本質に関して次のような例を挙げている。例えば「ノコギリの歯のようにギザギザの」とか「レンズのような形をした」とかなどがそうである。これらは「不精密であり、従ってまた非数学的なもの」(ebd.) である。このような記述的領圏においては一義的な規定は全く問題とならず、むしろ流動的なものを相手にしているのである。流動的とはいってもそこには「しっかりとした堅固さや、きちんと区別されうる」(III, S.139) という性格はもっているのである。それに対して精密な学問が扱う対象は、一義的に規定しうるものであり、また「人の見ることができないもの」(III, S.138) なのである。例えば精密な学問としてあげることができるのは、幾何学である。幾何学が扱うのは、理念化された対象、あるいは理念化された世界であって、そこでは対象はまさに一義的に規定されるのであり、直観ではなく、演繹が重要な役割を果たすのである。(5)

これまで現象学の基本的な性格や現象学が目指すものを述べてきたのであるが、そこで明らかになったことは、まず相関関係がフッサールを導く事象的動機であるということ。そしてそれに顧慮しつつ論理的なものの起源、特にS ist pという判断の起源を解明するということ、また現象学が扱うのは類型的本質

であるということである。これらの問題は当然「現象学全体を包括する問題」(III, S.303) の名称である志向性のもとに包摂される。フッサールは『受動的綜合の分析』において現象学を「志向的類型論 (intentionale Typik)」(XI, S.341) と性格づけている。この『受動的綜合の分析』は1920年代の論理学に関する講義をもとに成立しており[6]、「志向的類型論」という語があらわれるのは1921年に書かれた「静態的現象学の方法と発生的現象学の方法」と題された草稿においてである。この問題系は、これまで述べてきた諸問題とも重なり合うものであって、フッサールに従って、これらの問題系に志向的類型論という名称を与えてもよいであろう。

3 志向的類型論としての現象学

(a) 『イデーンI』における「下図」

志向的類型論という課題の方面で注目しなければならないのは、『経験と判断』における分析である。そこでは述定的判断の発生論的分析が行われているわけであるが、この分析は、「受動的に前もって構成された類型化」(EU, S.398) の分析とみることもできる。そして述定的経験の層における悟性対象の構成は、経験的類型の構成とみることができ、また一般判断の構成の分析は本質類型[7]の分析とみることができる。

この類型的本質の分析が本格に的に取り組まれるのは『経験と判断』や『受動的綜合の分析』においてであるが、しかしすでに『イデーンI』においてもそれを予示するような叙述を見いだすことができる。それは現象学的構成の問題を取り扱った第一四九節においてである。この少し前でフッサールは形式的諸学科の現象学的性格づけをおこない、そして次に現象学の本来的な場である領域的存在論へと移行する。まずは構成の問題がどのような問題なのかということををフッサールの叙述に従って明らかにしておこう。フッサールによれば構成の問題とは次のことを意味するといわれる。

> ある現出物の統一に必然的に相属している規制された現出系列が、直観的に鳥瞰されて、理論的に把捉されうるということ〔中略〕この現出系列は、その形相的固有性において、分析されえかつ記述されうるということ。統一性を帯びたものとしての一定の現出物と、諸現出の一定の無限の多様との間の相関関係の法則的働きは隈無く洞察されえ、こうしてあらゆる謎から剥奪されうるということ。(III, S.315-316)

ここで注目しなければならないのは、「統一性を帯びたものとしての一定の現出物と、諸現出の一定 (bestimmte) の無限の多様の相関関係」ということである。問題はなぜ単なる無限

なのではなく、一定の無限の多様なのかということである。この問題を解く鍵を先取りして述べておくならば、「類型的に一定の下図を描かれた（vorgezeichnet）諸方面」（III. S. 311）ということである。

物質的事物は、常に射映を通してわたしたちに与えられる。ということは、事物は常にその一面しか与えられないということである。そして隠されている部分は常に未規定のまま留まっている。しかしその未規定のまま留まっている部分をわたしたちは自由に想像することができるし、それによって直観に与えられていない部分を直観へともたらすこともできるのである。自由に想像するといっても、その自由は、全くの自由であるというわけにはいかない。というのも、ある一つの多様な射映に相関的な直観は、その対象についての直観であるということ、つまり直観は常に調和的な直観として前進すべきものであるからである。物質的事物は、常に不完全な所与性しかもたらさない。しかしながら、直観が調和的に流れていくことによって、そこに不完全な直観を完全なものにする可能性が存するのである。「どんな不完全な所与性もみな、おのれを完全化する理念的可能性のための規則を、そのうちに内蔵している」（ebd.）とフッサールはいう。この規則とはいったい何なのだろうか。

フッサールはこの問いに対して、事物のノエマの本質には「調和的直観の進行における無際限性（Grenzenlosigkeit）という理念的可能性が属しているということ、しかも類型的に一定の下図を描かれた諸方面に向かってそうであること」（ebd.）と答えている。超越的事物は、常に一面しかおのれを与えないので、様々にその対象を動かしてみたり、また私が動いたりしてそれを完全な所与性へともたらそうとする。その行為は限りなく続けられることになるが、どれだけ続けていってもそれを完全な所与へともたらすことはできない。それは例えばわたしたちが数を数えたとしても、いつまで数えたとしても最後の数を数えることができないのと同様である。それを完全な所与性へともたらすためには、理念化という一種の操作が必要なのである。この理念化が可能なのは、一つの規則がそこに前もって存しているからである。もしも直観の前進のたびになんの規則もなく全く異なったものが与えられてくるなら、理念化は不可能である。理念とは、常に同じものの反復のもとにしか登場しえないのである。従って無際限とは「以下同様（usw.）」ということであるが、それは常に同じ仕方で、あるいは常に調和を乱さないような仕方でそのようにどこまでも続くということを意味しなければならないのである。そこで「以下同様」ということは無限（Unendliche）と同じ意味を持つようになる。

『イデーンI』においてはこのような示唆にとどまっているが、この事物構成において常にすでに描かれている下図を描くのが、『経験と判断』においていわれていた受動的に前もっ

て構成された類型化であるということができるであろう。そこで次に『経験と判断』における本質類型の構成の分析を追っておかなければならないだろう。

(b) 『経験と判断』における類型の分析

『経験と判断』は「論理学の発生論のための研究」という副題がつけられているが、これはフッサールの関心が当初から一貫していることを示している。つまり学問とは、理論統一であるが、その理論は諸々の判断の基づけ統一であるということができる。現象学の課題はそのような理論をつくりあげることにあるのではなく、むしろその理論をなしている判断の起源を追求し、明らかにすることにある。従ってこの『経験と判断』においても、論理学の中心問題である述定的判断がいかにして構成されてくるのかということを明らかにすることが問題となっている。

さて、フッサールが「受動的に前もって構成された類型化」と述べた、前述定的経験の層の分析に移ろう。わたしたちが何らかの判断を行う場合、その判断は何らかの対象についての判断である以上、判断以前にその対象が与えられていなければならない。従って、判断以前に与えられるその対象は、いまだ顕在的な規定を伴っていないのである。とはいえ、その対象は全く未規定な対象であるということではない。つまりこの段階において判断者はいまだその主語対象に能動的に述語を与えているのではないし、またそれは本来の意味では対象と呼びうるものでもないのではある。しかしそれはそれなりの規定を具え、また対象と呼ぶことも許されるようなものである。

我々が対象に規定を与える以前にもそれはそれなりの規定を具えている、このことを習慣や連合が可能にしている。フッサールによれば、連合とは「受動的に前もって与えられる領野を支配する現象である」(EU, S. 77) という。またその働きは、「内在的発生の法則性の本質形式」(EU, S. 78) とされ、「なにかがなにかを思い出させる」とか、「あるものが他のものを指示する」といった純粋な内在的つながりのことである。もちろんこの連合は、時間意識の自己構成の上に成立するものであるが、時間意識の分析は、専ら時間という形式面のみを主題としており、抽象的な分析であったのに対して、この連合はその内容面の分析ということができるであろう。ケルンによれば、フッサールの連合には二種類の働きがあるとされる。[8]

一つ目は、同時に与えられたものの間での連合である。例えば、白い紙に赤い斑点がついているとする。そのとき白い紙の上にある赤い斑点同士は互いに融合する。そして赤い斑点と白い背景は、対照をなしているが、しかしながら、それらはともに視覚的に与えられるものであるという点で同質的でもあり、総合へともたらされる。この連合はまた原連合とも呼ばれる。

この連合によって初めて対象が世界から浮かび上がってくるのであり、これなしには我々は対象を知覚することはできないのである。

二つ目の連合は再生産的連合と呼ばれるものである。下図、あるいは類型という問題にとって重要なのは、この再生産的連合である。同質性による融合、そして同質性と異質性による対照という現象を通じて、最も根源的な対象の場ともいえるものが形成されてくるわけであるが、それを通して対象が自我を刺激し、また自我もその刺激に応諾するならば、そこから前述定的経験の層での前もっての対象構成が開始されることになる。この過程は、まず端的な把握、次に解明、そして関係把握という三つの段階を経て進んでいく。意識流は絶えざる流れなのであり、最終的には対象は「全く空虚で生命なき過去へと沈み込んでしまう」(EU, S.137) のである。とはいえ、その対象は全く跡形もなく消え去るのではなく、むしろそれは習慣として所有され、そしていつでも連合的に喚び起こされることができるのである。このように習慣として所有されたものが、何らかの刺激によって喚び起こされることこそが再生産的連合であろう。それではいかにして過去へと沈み込んでしまったものが喚び起こされることができるのだろうか。フッサールによれば、このことが可能となるためには、「同じものと似たものの間で前もってすでに『感性的』統一が受動的に構成されていなければならない」(EU, S. 209-210) という。例えば私が以前にキリンを見たとする。そうしてそれをじっくり観察して、その毛並みや顔、足などのそれぞれの特徴を捉えた。そうすると次に私がそれと似たような毛並みや顔や足をした動物を見た場合、それが私の習慣を喚び起こすということである。その動物と出会うことが多ければ多いほど私はその動物の特徴に親しみ深くなる。動物の特徴を類型と呼び代えてもよいであろう。そうすると私がある対象を構成する際に描かれている類型的な下図は、以前私がそれと似たような対象にであったことがあるからであって、以前の体験が私のなかに習慣として沈殿され、それがいまその沈殿している対象と似たものと出会うことによって連合的に喚び起こされ、下図を描いているのである。そしてそれを通して私はその動物をキリンとして知覚することになるのである。またその知覚は沈殿し、次の経験のための地平を形成することになる。ここで重要なことは、対象を類型的に親しんだものとして知覚するということである。それは対象の側で類型化が生じているということを意味しているだけではなく、相関的に、経験の側でもこれまでの経験の沈殿によって対象の側に対応した一定の法則が生じているということである。すなわち受動的な前もっての類型化とは、対象の類型化と同時に経験の法則性をも意味しているのである。フッサールは次のようにいう。

新たな知識活動は、それが単に記憶の中でおこなわれるのではなく、対象を再び根源的に、つまり知覚的に目の前にしているのであっても、かつての知覚とは本質的にことなる意味内容を持っている。対象は新たな意味内容とともに前もって与えられ、むろん空虚な地平とはいえ、獲得された知識の地平を伴って意識されるのである。能動的な意味付与の沈殿、以前の規定付与の沈殿は、それがあらためて解明されなくとも、いまや知覚の統握意味の構成要素となる。(EU, S.138)

しかしこの類型的な地平は固定しているのではなく、経験の度ごとに新たに更新されうる。現在の経験は、それまでの経験の沈殿の上に成り立っているのであるが、この現在の経験が以前の経験によってすでに形成されている地平を修正することもできるのである。従ってこの連合は、因果法則とは異なるものである。

このようにして経験は、何らかの対象からの触発を受けると、それによって以前の習慣が喚び起こされ、類型的な地平を描き、それに沿って経験が進行していく。そしてその経験がさらに沈殿して、後の経験において類型的な地平を描くための準備をすることになる。経験は、循環的に、あるいは類型的な地平が更新されるということも考慮に入れるならば、螺旋状に進行していくといえるであろう。ここまでの分析で類型についていえることは、類型とは経験の沈殿によって形成され、また経験によって修正されうるものであるということ、そしてまた対象の類型化は経験の地平を前提とするということである。

これまで前述定的経験において分析されてきた対象は、まだ本来の意味での対象とは呼べないものである。本来の意味での対象ということは、認識対象ということである。そしてまた認識対象ということの意味は、「一定時間のうちに直観的に与えられるという限定を超えて、同一のもの、同定しうるものとして存在し、一度直観のうちに与えられたら、直観が過ぎ去っても、恒常的な所有物として維持されうるもの」(EU, S.232)ということである。これが本来の意味での対象ということであるが、それは以前の対象と比べるならば、新しい種類の対象と呼ぶことができる。またそこに働く作用も新しい種類の作用であるということができる。つまりここで、「その対象はこれこれのものである」というような一定の判断が能動的に行われる必要があり、従って、受容的に把握されていた対象が論理的カテゴリーをまとうことになる。それゆえこの段階での対象は、カテゴリー的対象、あるいは悟性対象[9]と名づけられる。また新たな作用のほうは、受容性と比べるならば、新たな対象を生み出す創造的、または自発的な作用と特徴づけられる。前述定的経験に論理的カテゴリーの発祥地があるのだが、それは前述定的経験において準備されていた基体と規定を能動的に把握するこ

とによって論理的カテゴリーが成立するからである。

フッサールの現象学は、本質論であるがゆえに、単なる経験類型の段階に留まっていることは許されない。従ってこの経験類型を本質の領域にまで高め、本質類型を獲得する必要がある。この本質類型の獲得によって志向的類型論としての現象学もその目的を果たすことができる。そのための手続きが自由変更である。いまだ経験的な段階においては、無限に多様な現出といっても、それは経験に制約されたものなのであって、そこから出てくるものは経験的な一般性でしかあり得ない。従ってここで必要なことは、経験的な制約を取り払うことである。そのためにはまずわたしたちに与えられているものを一つの任意の範例と見なさなければならない。そしてその範例を自由に変更していく過程が自由変更と呼ばれるものであるが、ここで自由に変更していくといっても、その変更は同一の対象を基盤にした変更でなければならない。ということは自由変更の過程は次のようにあらわすことができる。

まず最初の出発点として取られるのは「S ist p」である。

そして次にpの位置に自由に変項を代入していくことになる。

S ist q.

S ist r.

以下同様にして、自由に述語の位置に様々な規定を付け加えていく。

このようにしてえられてくる規定p,q,r.....usw.が本質類型を看取するための基盤となる。これらの規定は、様々な差異をもつものであるが、しかしそれらは同一の基体Sの規定である限りで何らかの重なりももっているはずである。それはどのような変項が出てきても絶対的に同じままであって、それがなければそもそもその対象を考えることもできないようなものである。またこの過程において与えられてくるものは、経験的なものから純粋であって、従ってアプリオリであるということもできる。そのようにして絶対的に同一的な重なりが一般的本質としてうかびあがってくるのであり、それを能動的に把握することが本質看取である。

フッサール自身はこの一般本質を「プラトン的な意味でのイデアである」(EU, S.411) と述べているが、しかしむしろそれはわたしたちの経験に具わった規則、それなしにはわたしたちの経験が成り立ちえないような規則、と考える方が妥当ではないだろうか。フッサール自身次のように述べている。

純粋概念の形成は事実的に与えられる出発点の要素の偶然性や、その経験的地平の偶然性にも依存しないし、その開かれた範囲もいわば単に後にあらわれるというかたちで設定されるの

ではなく、前もってアプリオリに設定される。前もって設定されるということは、それがすべての経験的な個物に原則を提示できなければならないことを意味する。〔中略〕純粋概念の場合には、あらゆる経験に先立ってさらなる進行の原則が提示され、従って転倒や抹消の危険が排除されているがゆえに、事実上無限の進行可能性が明証的に与えられている。(EU, S. 410)

ここでいわれている前もって設定される原則こそが本質類型なのである。この本質類型に関する二つの見解は、相関関係ということを顧慮して解釈しなければならないだろう。そうすると類型的ということは、対象の側でいうならば、その対象にとって不可欠のものであるということができるが、経験の側では、類型に対応するような法則を先導にして作用が進展していくということ、つまりその類型なしには、あるものをあるものとして統握することすらできないような意識に具わった一種の法則である。このように類型を相関関係において理解することが重要である。そうでなければフッサールがロゴスの二面性に関して述べていること、さらに判断の起源を作用の側に求めるという試みは全く無駄なものとなる。

類型は上でみたように様々な判断を通じて、そしてその述語の重なり合いを基盤として獲得されるものである。つまり類型とは「同一の主語に対する不変項の述語の集合」ということができる。これに対応するような法則が常に経験に具わっている、あるいは常に経験を先導しているということは、経験そのものが論理的、あるいはロゴス的であるということではないだろうか。

このことこそフッサールが明らかにしたかったことである。フッサールがロゴスという言葉の二面性を論じていたとき、それは一方で論理法則を、そして他方で理性の働きを論じていたのであり、現象学の課題は後者を明らかにすることにあった。従って現象学が解明すべきものも当然のことながらロゴスの一方の側面であり、それ自体がロゴス的でなければならないのである。いまここで明らかになったことは、経験は類型という論理的なものに先導されているということなのであり、そしてその類型そのものが論理的な構造をもっているということである。従って、それに則る限りその経験そのものもまたロゴス的であるということである。

フッサールが視野におさめていたのは、S ist pというように表される述定判断だけであるが、少なくともこの形式に関しては、その起源を明らかにすることができたといえるのではないだろうか。つまり、わたしたちの経験の原則である類型がそもそもS ist pという形式をもっているのであり、それなしにはいかなる経験も成り立たないのであるから。

4 結論

フッサールは「未知は同時に既知の一様態である」(EU, S.34) という。なぜならわたしたちが経験しうるものは、常にすでに類型的に前もって下図を描かれうるようなものであるからである。経験は類型という地平に囲まれているのであって、何らかの対象を統握する場合、その地平を通して対象を統握せざるをえないのである。相関的に対象の側でもその地平に従っておのれを現してくるということになる。もちろん対象は、それ自身「類型として固有のアプリオリを持つ」(EU, S.32) のではあるが。

フッサールにとって対象があるとは、知覚されてあるということを意味する。すなわち対象は常に意識にとっての対象である。この意識は常に対象を類型を通して見る。このことが意味するのは、わたしたちは常に対象を、論理あるいはロゴスを携えて見ているということである。そうすると先に述べたように、相関的に諸対象の総体である世界そのものも常に論理的、ロゴス的であるということがいえるであろう。それゆえロゴス一般の学である論理学は、単に思惟の法則や諸々の判断や推論などを統制する規則であるというに留まらず、世界そのものがそれに従って現れてくる規則であって、世界はロゴス的であって、論理学は「世界の論理学」(EU, S.37) であるということもいえる。

このような結論はこれまでのフッサールに関する研究でも明らかになってきているように、フッサール現象学のロゴス中心主義的な、そしてまた理性主義的な性格をさらに強調するということになるであろう。しかしここにはまだ立ち止まって考えねばならない点があるように思われる。ここまでの考察で、論理とロゴスという言葉を並置して使用してきたが、それが妥当なのかどうかということが問題である。論理学的カテゴリーというものは、前述定的経験の内にその根を持つとはいえ、わたしたちが対象を能動的に把握するときに初めて生じるのである。そうすると前述定的経験において働く規則は本来「論理」とはいえぬものである。それが「論理」になるとき何らかの変化が生じることはないのだろうか。すなわちわたしたちは常に「論理的」に分節された世界しか経験することはできないのだろうか。例えばある対象を表現する場合、その表現方法としては、言語、音楽、絵画、身体など様々なものがある。しかしそれらはすべて同じ「論理法則」に従っているといえるのだろうか。フッサールは主部と述部の二分節性を述定判断の普遍的性格であるとしている。[10] 言語に関してはこの見解はある程度はあてはまるであろう。[11] しかし音楽や絵画や身体などによる表現方法にこの二分節性をあてがうことは不条理であろう。だが、わたしたちの経験が類型化されるということは疑いえないように

思われる。従ってわたしたちの意識には「論理」ではないがそれなりの規則があるということになる。それをフッサールに従いロゴスとよんでおこう。従って論理とロゴスという概念は同じ外延を持つのではなく、ロゴスのほうが広い外延を持つ。すなわち論理とは言語表現のためのロゴスである。

フッサールの目的は、学問を構成する諸判断の現象学的解明にあるのだから、もっぱらその主題を判断に限定して分析を進めていったということを一方的に非難することはできない。むしろフッサールが掬い上げることができなかったものを、すなわち述定的判断からこぼれ落ちてしまうようなものを汲み上げていくことこそが今後の課題なのである。

注

フッサールからの引用は本文中に略記号とページ数で示した。フッサリアーナからは巻数をローマ数字で、それ以外は以下を参照。

LU: *Logische Untersuchungen Erster Band*, Max Niemeyer Verlag, 1980

EU: *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner Verlag, 1972

(1) フッサールが『算術の哲学』における心理学主義の立場から『論理学研究』での論理主義の立場に移行したことに関しては、フェレスダール、モハンティ、ベルネらの研究によってかなり見通しがきくようになってきている。しかし本稿ではこの問題を扱うことはできないので、稿を改めて論じたいと思う。

(2) 第一版では「論理学的起源」となっていたのをフッサールが第二版で改訂した。

(3) Vgl., XVII, S. 22

(4) Vgl., LU I, S. 253

(5) 従って現象学は体験の幾何学ではないということになる。

(6) 1920／21年冬学期の「論理学」、1923年夏学期の「現象学特殊問題」、1925／26年冬学期の「論理学の根本問題」という三回の講義からなっている。

(7) この語は『イデーンI』での類型的本質と同義と考えよいだろう。

(8) Vgl., Rudolf Bernet, Iso Kern, Eduard Marbach, *Edmund Husserl - Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, S.187f.

(9) ここで二種類の悟性対象があることを注意しなければならない。一つは「事象上の共通性」に基づいた悟性対象であり、もう一つは「形式上の共通性」に基づいたものである。類型という問題にとって重要なのは、前者のほうであり、後者は『算術の哲学』における集合的結合の問題につながるものである。

(10) Vgl., EU, S. 4

(11) 例えば詩的言語に関してはこの二分節性がそのまま適用できるとは限らないであろう。

付記　本研究は平成十一年度文部省科学研究費（特別研究員奨励費）による研究の一部である。

（きひらともき　大学院博士後期課程・臨床哲学）